土地利用革新プログラムセミナーシリーズ第１６回

土地利用革新のための知の集約
Land Use Program
RIHN

2025 年度 国際セミナー
「スケールアップの再考：制度・ガバナンス・地域性に基づく土地利用」

日時：2026 年 3 月 12 日（木）9:30〜18:00

会場：総合地球環境学研究所講演室（京都）およびオンライン（Zoom）

「土地利用革新のための知の集約プログラム」は FairFrontier プロジェクト、SATOCONN プロジェクト、多元世界プロジェクトとともに、2026 年 3 月 12 日（木）に、総合地球環境学研究所講演室にてハイブリッドでセミナーシリーズ第 16 回を開催しました。国内外の政策立案者、実務家、研究者が参加し、欧州（ベルギー、英国、ブルガリア）、日本のスピーカーによる講演が行われました。講演から浮かび上がった、持続可能性志向の土地利用ガバナンスにおける「スケールアップ」という分析的・規範的概念を、批判的に検討する議論が行われました。会場とオンライン双方で、政府、研究機関、企業や団体、自治体などで農業や農業政策を専門とする方々61 名が参加しました。

プログラム

9:30–9:45 **開会挨拶**：セミナーの目的と分析的視座
荘林 幹太郎 教授（プログラムディレクター RIHN）

9:45–12:30 **セッションⅠ：スケールアップの概念的・制度的次元**

テーマ 1：制度化と政策的整合

1．地域的取り組みを安定化させる制度設計
　レオ・マイヤー博士（元 欧州委員会 農業総局 政策評価ユニット長）
2．土地利用実践のスケールアップにおけるガバナンス空間としてのサプライチェーン
　ルーシー・マクレナン博士（英国 ADAS 有機研究センター ディレクター）
3．目標間およびガバナンス・スケール間のトレードオフ管理
　木村 崇之 博士（農林水産省大臣官房　環境バイオマス政策課長）

発表後、末松 広行 博士（農林水産省 元事務次官）より、制度および政策ガバナンスの観点から統合的コメント

テーマ２：マルチレベル・ガバナンスにおける地域的取り組みの再定位

４．地域実験から得られる示唆：地域に根ざした農村イノベーションのスケール展開

ニナ・デニソヴァ 博士（ブルガリア ソフィア大学）

５．土地利用ガバナンスにおける仲介者としての市民社会組織

藤田 卓 博士（公益財団法人 日本自然保護協会）

６．土地利用主体間の連携構築：COP30 からの示唆

大津 愛梨 氏（有機農業者・客員准教授 RIHN）

発表後、西澤 栄一郎 教授（法政大学）より、マルチレベルおよびポリセントリック・ガバナンスに関する理論的含意について統合的コメント

12:30–13:30 昼食休憩

13:30–14:30 **セッション II：FairFrontiers プロジェクトからの実証的考察**

報告者：

グレース・ウォン博士（FairFrontiers プロジェクトリーダー RIHN）

報告後、ジャネット・ドワイヤー教授（SATOCONN プロジェクトリーダー RIHN）および田村 典江博士（Pluriverse プロジェクトリーダー RIHN）との討論を行い、制度、アクターネットワーク、価値調整の観点から、FairFrontiers の成果がスケールアップに関する理論的議論にどのような示唆を与えるかを検討

（クローズドセッション）

14:45–16:45 **セッション III：ワークショップ 「スケールアップ」の意味を共創する**

参加者自身が発表やコメント、自らの専門的経験・知見を踏まえ、土地利用イノベーションのスケールアップにおいて最も重要と考える要素を抽出、これらの要素を整理・統合し、ワークショップのテーマとして構成

ファシリテーター：

ジャネット・ドワイヤー教授

（SATOCONN プロジェクトリーダー RIHN）

田村 典江 博士（Pluriverse プロジェクトリーダー RIHN）

・新たな優先課題や視点を浮かび上がらせることを意図

・スケールアップを、あらかじめ定義された分析概念としてではなく、集合的熟議を通じて形成される生成的概念として探究

17:00–18:00 ラウンドテーブル：

土地利用イノベーションのスケールアップに関する共有研究・政策アジェンダの構築に向けて

ファシリテーター：

イ博士（SATOCONN プロジェクト上級研究員 RIHN）

18:00 閉会挨拶